

あれだよ、アレアレ

まり。

「厳正な選考の結果、坂口久美子様は最終選考に合格されましたのでお知らせいたします。つきましては、ご入社にあたり当社にご提出いただく書類を本日発送させていただきます。九月一日までに、必要な書類をご用意の上、同封の返信用封筒でご返送……」

ネットで「合格通知」で検索して出てきた文章と、全く同一の文面で来るとはねえ。坂口久美子は、仕事にもかかわらず、自分のスマホをいじっていた。中途採用に応募し、テストや面接の結果から採用通知が来ていることを、現在働いている職場で確認していた。「坂口さん、次の会議の資料、人数分」

背後から急に声をかけられ、久美子はスマホを机の上のバッグに放り込んだ。振り向いた先には、無表情に紙の資料を突き出す上司、加藤係長がいた。

細身で既製品のスーツの三十代後半、加藤はいつもクールというか、感情の起伏が見えにくい。メガネが反射して眼差しが見えず、彼が怒っているのか嬉しそうなのかも判別しにくい。とっつきにくいよね。久美子は、いつも最小限のセリフしか言わない加藤を、「AI係長」と勝手に名付けていた。

久美子は、AIから言われた通り、オフィスの中央にある複合機に行き、自分の社員カードをかざした。

「坂口久美子」の表示、でコピーを操作。操作履歴には、ずらっと「〇年〇月〇日 坂口久美子 コピー XX枚」が、何十行も並んでいた。

「私のコピーばかり。いや、私はコピーばかり」

複合機は、コピーよりもプリントやスキャン機能を利用することが多い。他の部署の人は、各自で資料を作り、人数分プリントしていた。販売促進チームのリーダー加藤は、チームのメンバーに資料を作らせて自分に集め、資料を最終化する。その資料を、自分で複数印刷をせず、一部印刷して、久美子へ人数分のコピーと会議への配布をさせるのだった。

久美子に対して、加藤は最初から「チームメンバー」ではなく、まさかの「女性は補助職」として位置づけていたのだった。男女の区別なく採用され配属されたはずの中で、思わぬ「仕打ち」だった。

もちろん、久美子は加藤に直接確認した。

「なぜ、私には、資料作成ではなく、資料のコピーや会議の準備、事務補助の仕事ばかりなのですか」

加藤からは「配属したばかりだから」という回答はあったものの、一向に状況は変わらなかった。久美子のほうも、会社のしかるべき部署に相談するなど対応を考えようかと思っていたところで、八月の下旬に一週間、会社は一斉夏期休暇に入ってしまった。

*

夏期休暇に入っただけで中途採用が色々あることを知った久美子は、とりあえず条件に合った企業の何社かにウェブエントリーをしてみたところ、一社から、採用面接の案内が来た。

夏期休暇に予定も無かった久美子は、すぐに来社日を設定、一般常識のある社会人かどうか判別するだけのようなテストを受けた後、人事担当者との面接も行った。

帰宅した夜、規定文そのままの「最終面接への御案内」のメールに指定された面接日も、夏期休暇期間内で、最終面接に臨んだところで、夏期休暇が終了していた。

「もう、人事にAIのことを相談する必要もないね」

あっさり転職先をゲットできた久美子はすぐに行動を起こした。退職の意思は一ヶ月以上前に伝えること。八月中にさっさと退職願を出さないと。

「そうですか」

AI係長は、そう言いながら退職願を出した久美子を見た。相変わらずメガネの反射で、表情がわからない。あっさり受理されたことで、加藤が自分をどう見ていたのか、再認識させられた、と久美子は少し気が滅入った。

まあ、いいか。次の会社でやり直そう。久美子は九月末退職と設定し、九月中旬からは有休消化をし切って退職した。

*

十月一日、久美子は、この日のために新調したスーツを着て、転職先の会社に向かった。新卒入社のような感覚だった。再就職先は中堅の食品メーカー。久美子は企画スタッフで、支店の営業職で採用された男性二名の、三名が「中途入社式」に参加した。

本社が新宿の高層ビルにあるものの、東京も含めて、全国に四カ所の拠点と、二つの製造工場を持っていた。館内のエレベータホール前にある企業リストで、本社と同じフロア内に三社の他社企業が入っているのが分かった。採用試験や入社前の書類提出の訪問で、既に何度か来ていたが、改めて思った。

「本社といつても、コンパクト、なのかなあ」

中途採用三名に対する「入社式」なので、簡単ではあるものの、社長との面談、人事担当者が会社の概要や各部署の説明、事務担当者からの事務処理概要の説明と、本社の会議室で、一日講習会のような説明が二日間続いた後、各自「配属先」への出勤となった。

企画スタッフ採用の久美子は、本社ではなく、東京事業所の配属だった。府中市にある東京事業所は、工場と併設して、営業所とスタッフ部門のオフィスもあった。

コロナ解除された後、原則全員出社になっていた。

前の会社でもオフィス出勤をしていた久美子だったが、この会社で、軽いカルチャーセッションを受けた。

朝八時四十分にチャイムが鳴った後、オフィス内に「ラジオ体操第一、用意」のアナウンスが流れ、あのラジオ体操の音楽が流れる。そのアナウンスの段階で、オフィス内の人達が、席を立ち、「カラダを動かせる」スペースを確保する。

「腕を前から横に、サン、ハイ」

なぜか低い声で「イチ、ニイ、サン、シイ」と数えながら、皆で一斉に体操を行うのだった。もちろん久美子も同じように体操した。郷に入っては郷に従え。

「ワタシタチハ、ツネニ、オキヤクサマノキモチヲタイセツニ…」

体操終了後の毎年初めに設定される会社のモットーの唱和も、何日も続けていくうちに慣れていった。

昭和のメーカー、だね。久美子は、前の会社とのギャップを楽しんでもいた。申請すれば在宅勤務可能だが、基本的にはオフィスに定時出勤、勤務先の周りには、余り飲食店が無く、社食もあるのだが、弁当派も多い。服装も自由ではあるが、併設の工場では会社名入りの作業服着用で、社内では作業服も多く見かける。

久美子にとって、転職の契機になった「活用されたい」は、充分味わえた。配属初日からチームメンバーとして迎えられ、分担して新製品企画のための市場調査など、どんどん仕事を任された。

工場運営が主体のせい、「オンとオフ」をしつかり区切った働き方を求められた。休憩時間はしつかり取る。なるべく残業しないよう効率化を考えて行動を促される。「会議は一時間で」といった紙が貼られている。仕事の時間は、オフィス内で活発な会話、パソコンのキーの早い音など、皆が仕事に集中しているようだった。

終業のチャイムが鳴ると、一気にゆるやかな空気に変わるのだった。さつさと帰る人や、皆で飲みに行こうと誘い合って出て行く人、皆オフタイムへの切替えも早かった。

久美子も、配属の日に、就業時間後に「歓迎会」が設定されて、一番近くの居酒屋で飲み会に招待された。その後は、何度か誘われて飲みに行ったり、就業時間後で有志によるいくつかのレクリエーション、テニスやカラオケに参加したり、そのまま帰宅したり、会社での過ごし方も慣れてきた。

*

入社して一ヶ月過ぎた、十一月に入ってから、オフィスの社内掲示板に「アレアレ、は十二月二十二日になりました」という張り紙が出ていた。

「あの、アレアレ、って何ですか」

久美子はすぐに隣の席の先輩の主任、山中剛に質問した。いつもすぐに色々教えてくれる、親切な山中が、少し困った顔になった。

「うーん。最初の年は、まずその日になってから教えることになっていたので。待っていてくださいね」

どうということだろう。久美子は困ったが、大柄でおっとりして何でも答えてくれる山中が、回答できないと言っているのだからそれ以上、確認できなかった。

他の人達にも、「アレアレ」について聞いてみたが、笑って何も言わない人、「それは秘密・ヒミツ・ひみつ……」と変な歌を歌い出す人、「そうだよねえ、知りたいよね。でも会社の規則なので」ときちんと説明する人、誰も「アレアレ」を教えてくれなかった。

仕方ない。その日まで待つしかないか。久美子は、もう質問することをあきらめ、日々の仕事をこなし、オフを過ごしていた。

そしてその日、十二月二十二日になった。久美子はドキドキしながら出社したが、「アレアレ」当日なのに、いつもと同じように仕事が始まった。仕事でも、誰も「アレアレ」が出てこない。一体、何なのか、いつわかるのだろう。久美子も、いつものように仕事を進めながらも、何か起きないか気にしていた。

キンコン、カンコーン……

終業チャイムが鳴った。

「わーい、アレアレだ、これから行くぞ」

皆が一斉に同じセリフを発したので、久美子はびっくりした。山中が久美子に近づき、「すみませんね、坂口さん。とにかく帰り支度して、会社の玄関に集合です」

回答が引き延ばされたまま、久美子は指示された通りに、支度して会社の出口に行くと、オフィスのメンバーが集まっていた。

「では、オフィス組は集合したので、先に行きます」

誰かの声があると、行き先を知っている皆が歩き始めた。久美子だけが分からないまま、一緒について行った。

オフィス組が到着したのは、「歓迎会」やその後の飲み会でも利用している、いつもの居酒屋だった。今日は入り口に張り紙がしてあった。

「ぼう」

久美子が、その一文字に声を出して読んだ。

「あ、読まない。読まない」

何名かがすぐ、注意してきた。なぜだ。

「あ、う、結局、アレアレって、何……」

会社の人達は、質問しようとしている久美子を店の中に押し込むように入れた。

「ここで、やっとだよ」

店内には、既に東京事業所の所長、川村哲夫がいた。

「おお、坂口さんだったね。今日が初めての人は君一人だったから、何がなんだかわからずつらかっただろう。すまんね」

オフィス組の人達が皆、席に着いたところで、川村事業所長が、立ち上がった。

「さあ、＼アレアレ＼から、＼ぼうねんかい＼だ、乾杯」

そう言つて、ビールのグラスを高く掲げた。

「乾杯」

他の皆も一斉に大きな声で言うと、ビールを飲んだ。そこで、久美子はやっと、＼ぼうねんかい＼を＼アレアレ＼と呼んでいたのだとわかった。

「でも、なぜ忘年会を、アレアレにしているのですか」

久美子が山中主任に尋ねると、山中はビールをつぎ足しながらにやっと笑った。

「それはね。＼ぼうねんかい＼と言つてしまうと来てしまうのだよ。だから、他の言葉＼アレアレ＼に替えて言っているのだ」

来てしまつて、何が来るのだ。久美子は、真面目な顔で言う山中に、笑つてしまいそうになつたが、でも、この人、冗談は言わない人だよねえ。

久美子は疑問に思いながらも、ビールや、他のアルコールも飲み、ドンドン出される居酒屋の料理も食べ、オフィスの人達のお祭りのようにはしゃいでいる中で、自分も一緒になつて楽しんでいた。

その日は朝までかけて飲み会は続き、始発電車が出る頃に、皆は店を出て、帰った。久美子も家に着くなり、ぐったりベッドに横たわつてしまった。週末はゆっくり休もう。

*

＼ぼうねんかい＼後の週明けの月曜日、いつものように始業とともにラジオ体操が始まったが、皆ほとんどカラダを動かさない。仕事が始まっているのに、皆ゆったりコーヒーを飲んだり、雑談したり、いつものオンタイムの働きとは全然違つていた。

久美子も同様に、カラダが動かないし、仕事の内容も思い出せないような、ぼっかり穴が開いたような感じがしていた。

「ぼうねんかい、を楽しむと、ぼうねんしてしまうんだよ。ほとんど仕事にならないのだ。だから年末はぼうねんかいの前までに片付けてしまうのだよ」

山中主任はそう言うと、タバコを吸いに出っていった。ホントに、オン・オフがはっきりしている、いや、し過ぎていて。

「でも、こういうのも、悪くないな」

久美子は、しつかり＼社員＼になつていた。

(了)